
恋と温もり

中村ミノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋と温もり

【コード】

N6854Y

【作者名】

中村ミノ

【あらすじ】

麻由美はもうずっとずっとこの日に告白をすると決めていた。まだ少し肌寒い春の日の、少女の告白の話。

四月二日の校舎内は、春休みということもあってがらんとしている。

窓の外を見れば桜は今は盛りと咲いているが、いつもは賑やかなここが静まる様に、少しだけ寂しさから来る肌寒さを感じた。

「……変な感じ」

熊倉麻由美は苦笑と共にそう呟いて、リノリウムの床で出来た廊下を来客用のスリッパでペタペタと歩く。

つい先日まで当たり前前に制服と上履きで歩いていた身としては、ここがもう自分の居場所ではないのだと言われている気分だ。

「頑張れ、私」

途端に弱気になる自分を叱咤して、右手に持っている紙袋を抱え直す。

すべては、この日のために計画したこと。

何がきっかけかと言われれば、単純にあの手が好みだった事が興味の始まりなんだと思うけれど、麻由美は英語教師の藤堂瑛士が好きだった。

長い前髪と大きな黒縁メガネで素顔を覆う姿に、多くの生徒たちは引いていたが、それが童顔を舐められまいとする先生の自衛策だと噂で知れば、好奇心と興味は自然と好意へと変化したし、必要なこと以外を話さない無口でぶっきらぼうな態度は、相手を物凄く考

えて言葉を選んでいのだと、その優しさを知ってしまえば好意は恋へと変化した。

そして何よりもやっぱり、最初に惹かれたあの手に触って貰いたいと思ってしまうた事で自覚した、憧れなんかでは終わらせられない想い。

だから麻由美はこの日をもうずっとずっと前から計画していたのだ。

卒業しても不自然じゃなく会いに来れる理由が欲しくて、借りた参考書を忘れた振りして返さなかったのも、卒業式を終えても、高校から籍が抜けるを待ったのも、これが失敗しても先生の迷惑にはなりたくなかったから。

でも、一日じゃなくて二日にしたのは、エイプリルフールの冗談で逃げて欲しくないから。

受験の時よりずっと緊張するけれど、これで長い片思いに決着が付けられるのだと思えば、どこかホッとしている自分もいる。

震えそうになる指先に力を込めて参考書入りの紙袋をしっかりと握りなおした麻由美は、辿り着いた英語科準備室の扉の前で、大きく息を吸い込んだ。

* * * * *

「お久しぶりです。藤堂先生」

久しぶりに入った英語科準備室は、麻由美の予想通りに藤堂一人

のみだった。

一生徒であることを微塵も崩さず、何度も通っては今麻由美が座っている応接セットで英語を教わったのが、何だか遠い昔のように感じる。

「こんにちは。わざわざ届けて貰って済まないね」

「いいえ。お借りしたまま返し忘れた私がいけないんですから、気にしないで下さい」

にこやかに話しながら、麻由美は参考書が入った紙袋をそのまま手渡す。

ここまでは計画通りだが、この後どうやって告白を切り出すべきか俯いて必死で考える。

本当はもう緊張で心臓が壊れそうな程、早い鼓動を刻んでいた。

「……っ、あ、あのっ！」

震える両の手をぐっと握りしめて顔を上げ、声を掛けた麻由美だったが、その続きを言うことが出来なかった。

何故なら、鼻先十センチの距離に、麻由美の顔を覗き込む藤堂の顔があつたからだ。

「っ!?!」

あまりに近いその距離に、麻由美は言うべき言葉を見失う。

「せ、んせ?」

しかもいつの間を外していたのか、初めてメガネと髪で遮られていない素顔で。

これ以上激しくならないだろうと思っていた心臓が、更に苦しいほど鼓動を刻むのは、童顔故に舐められるからと聞いていたその素顔が、童顔ではなく端正で精悍と言える部類、つまりは信じられないくらいに整っていたからだ。

「ずっと、不思議だったんですよねえ」

麻由美の動揺を分からない筈がないのに、藤堂は顔を近付けたままで口を開く。

「な、にを、ですか？」

真面目なだけが取り柄だった麻由美に、男性への、しかもこんなにとびきりの顔を持つ人間への免疫がある訳もなく、声の上擦る。

「熊倉さん、僕のこと好きですよね？」

そこに落とされた余りに直球な爆弾に、麻由美は大きく肩を揺らした。

「でも、君は今日初めて僕の素顔を見ましたね？」

羞恥で顔に血が上る。鏡を見なくても麻由美は自分の顔が真っ赤になっていることが分かって、頭の中が真っ白だ。

当初の目的すら思い出せない沸騰寸前の頭は、無意識に藤堂の問いに頷いた。

「時々うつかり僕の素顔を見て言い寄ってくる生徒がいるんで、ち

よつと君のことも疑っていたんです」

見た目だけに近づいてきた生徒だろうかと、と言う言葉を言外に感じて、長い前髪と大きな黒縁のメガネはこのためにあるのだと気付く。

「でも、君は本当に真面目な子ですね。……そしてとても優しい子だ」

「……？」

そう言っただけ目を細める藤堂に、麻由美は僅かに首を傾げる事で何が言いたいのかわからないと伝えた。

藤堂はくすりと微笑んで右手の指の背を麻由美の頬に滑らせる。ずっと触れて欲しいと願っていた藤堂の指先に触れられた麻由美は、緊張でピクリとも動けない。

「在校中は僕の立場や迷惑を考えてくれたからこそ、頑ななまでに生徒でいてくれたでしょう？……そして、だからこそ『今日』を選んだ」

違いますか？と問われて、麻由美はやはり頷く。

「人を思いやれる、あなたはとても優しい人だ」

間近に見る藤堂の、珈琲のような深い茶色の瞳が眇められて囁かれた言葉に、麻由美は泣きそうになった。

幼い頃から長女気質がそうさせるのか、子供らしく無邪気に甘えるよりも、周りの空気を読んで自分を抑えてしまう性格だった。

そんな性格は、同世代の異性に『可愛げがない』とか『母や姉に

似ている』と、恋愛対象から外されることが多かったし、実際これまでもそんな理由で失恋している。

だから、藤堂にこれまでの自分を認められる言葉を貰えたのは何よりも嬉しかった。

「……先生が好きです。素顔なんてホント、今日まで知らなかったけど、先生のそう言う優しいところが好きです。……ずっと、そう言いたかったんです」

だから、言わせて貰えてありがとうございました。と続けて、麻由美はすっきりした気分で帰ろうと思ったのだ。

「ありがとう。私も、好きですよ」

藤堂に、そう言われる前に。

「はい？」

何を言われたのかよく分からなくて、麻由美は目を瞬かせる。

「好きです、と言いました」

「誰が、誰を、ですか？」

「私が、あなたを」

「……はい？」

目を反らせないままで急激に頬を紅潮させてゆく麻由美に、藤堂は小さく苦笑を漏らすと、己の掌で見開いたままの瞳を覆う。

そのまま鼻先十センチの距離をゼロにして、唇を触れ合わせた。

「っー!」

触れ合わせただけの口付けは、麻由美が肩を揺らすと同時に離れる。

一緒に瞳を覆う掌も外されて、ゆっくり視線を上げれば、未だ焦点が合わないほど近くにある藤堂と視線が絡む。

「……そんなあなただから、好ましいと思っんですよ」

さっきの話の続きだと気がつく前に、もう一度唇が近づく気配がして、麻由美はそっと瞳を閉じる。

そして触れた優しい温もりに、麻由美は心から春を感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6854y/>

恋と温もり

2011年11月20日19時49分発行